

日常災害の実態調査

—小学校における事故を対象として—

正会員 遠藤佳宏^{*1}

同 宇野英隆^{*2} 同 直井英雄^{*3}

1. はじめに

これまでの調査などからも、日常災害で特に問題の多い年齢層は子供と老人であることがわかってきている。このうち、老人にとっての主たる生活環境は住宅であろうが、子供にとっては、住宅以外に幼稚園や学校なども生活環境としてかなり大きな部分を占めている。ところが過去の調査例は、住宅あるいはこれを含んだ建物全般を対象としたものが多く、学校等についてはまだこれほどの蓄積をみていない。このような意味から、今回、保育園、幼稚園、小学校を対象とした日常災害の実態調査を行なったので、そのなかから小学校に関する部分を報告する。

2. 調査の概要

- 2-1. 調査対象 千葉県下で日本学校安全会に加入している小学校728校、生徒483,320人。なお、千葉県における小学校生徒の安全会への加入率は99.6%であるため、ほぼすべての小学校を対象としたことになる。
- 2-2. 調査方法 千葉県学校安全会に報告された昭和53年度中の災害報告書から、建物に關係して生じたと考えられる日常災害を選び出し、用意した調査用紙に必要項目を書き写し、集計した。
- 2-3. 調査項目 ①学校名・所在地、②被災生徒の学年・性別等、③災害発生場所、④災害発生時の活動区分、⑤災害発生日時、⑥災害発生状況(事故の種類、けがの種類、受傷身体部位、けがの程度、けがの処置)等

3. 調査結果

調査の結果、図1に示すように、学校管理下での災害12,109件のうち建物が関係した事故2,134件、このうち入院を要したものが74件であった。この2,134件の日常災害について、いくつかの観点から集計したものを図2～図7に示す。なお、不明なものの扱い、重複集計などの関係から、総件数は必ずしも一致していない。

4. 考察

この調査は千葉県の小学校を対象にしたものではあるが、小学校という建物の性格および日常災害の性格から推して他の地域でもこれとそれほど異なる発生状況を示すとは考えにくく、この結果を全国の小学校を代表するものと考えてもそれほど間違いないのではないかと考えらる。調査の結果、およそ次のようなことがいえる。

- ① 学年では、6年を除き高学年ほど件数が増える。性別では、どの学年でもほぼ2/3を男が占める。
- ② 発生場所では、滞在時間の長い教室が多く、次いで高低差があるためととも危険をはらんでいる階段が多い。
- ③ 事故の種類では、転倒が最も多く、次いでぶつかり、転落が多い。墜落は件数の割には入院がやや多い。
- ④ けがの種類では、打撲、骨折、ねんざ、挫傷で過半数を占める。
- ⑤ 場所別に事故の種類をみると、階段と便所を除くいずれの場所でも転倒が1位を占める。
- ⑥ 学年と事故の種類の間をみると、墜落、転落はほぼ高学年になるほど増え、転倒は逆に減り、ぶつかりはそれほど変化がないといえる。

5. おわりに

調査にあたっては、日本学校安全会千葉県支部に多大な協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

建物関係		その他	12109件
入院	その他		
0.74	2.134		100%
0.061	17.6		

図1 建物が関係した事故数

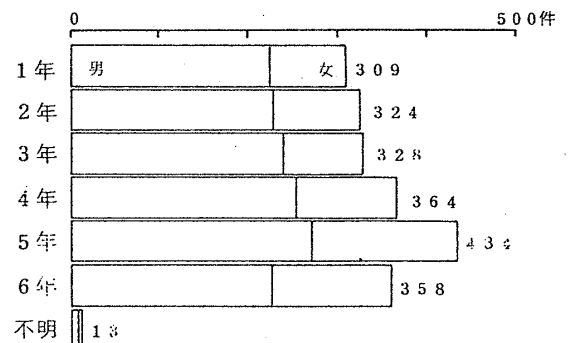


図2 学年別・性別発生件数

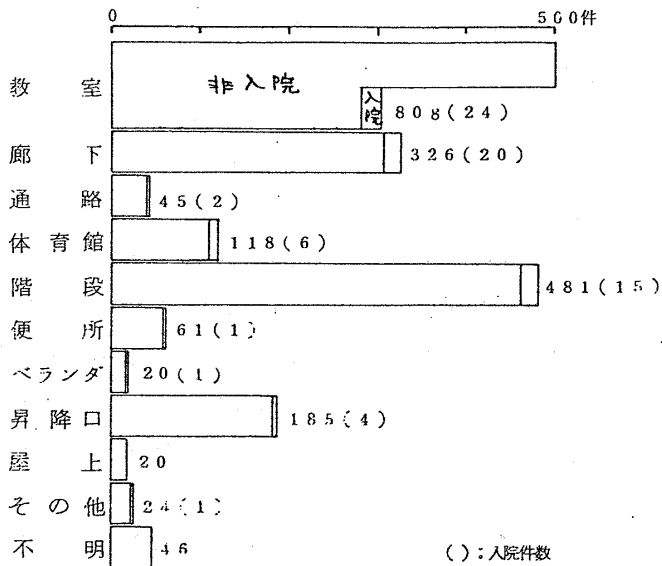


図3 場所別発生件数

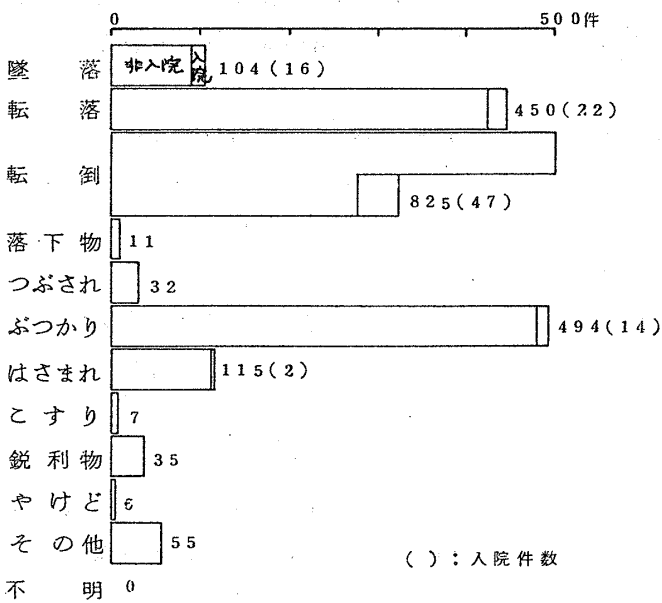


図4 事故の種類別発生件数

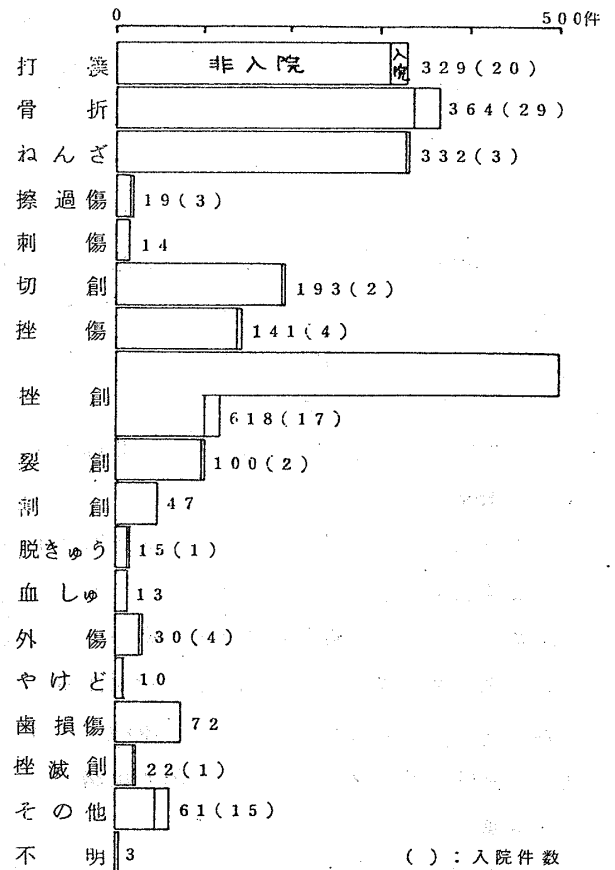


図5 けがの種類別発生件数

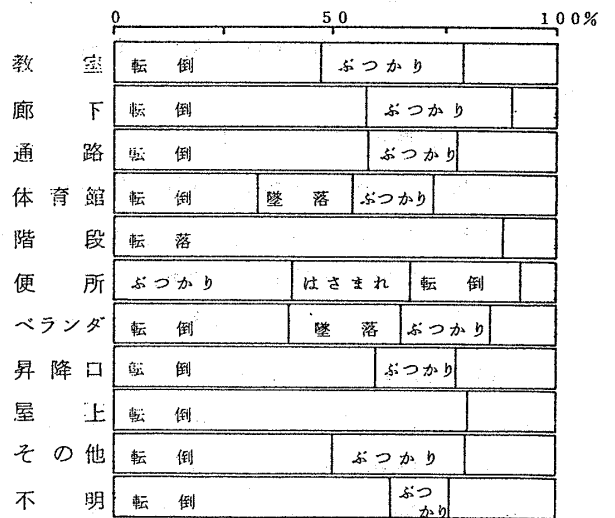


図6 場所別・事故の種類別の割合

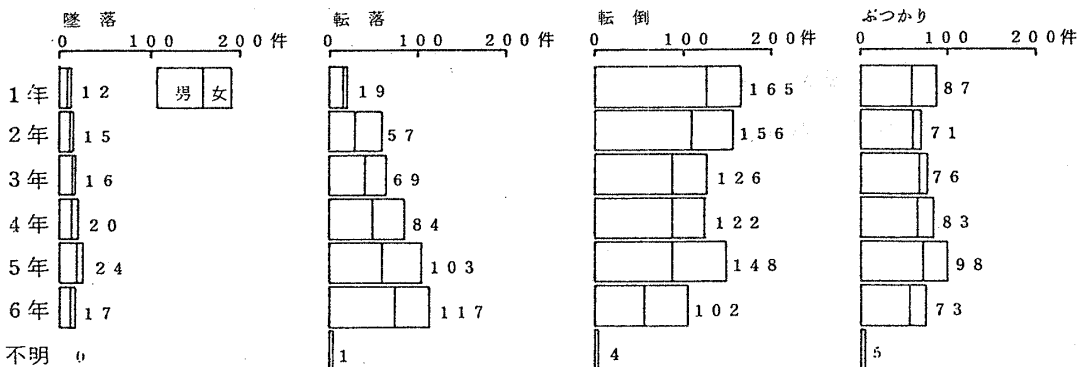


図7 学年別・事故の種類別発生件数

*1 千葉工業大学助手
*2 千葉工業大学教授・工博
*3 東京理科大学助教授・工博